

な重荷だということを感じさせられた。他大学で開講されている講義内容や数種のテキストを見ると時代範囲はルネサンスから第2次大戦後1950年代までにまたがり、流派、個別思想家を位置づけ系統づけしていくと、週一回で一年間(24回)かけてもおさえきれないほど対象が広範に及ぶこと、さらに個別の思想内容を分析しながら先行思想、同時代思想との類縁、対立関係を把握していくには多くの時間と再構成が必要だということになる。それと私は最初からその年の講義は毎年再構成するようにして来た。それゆえ90分の講義に4、5日の準備が必要で常に追われている感覚で過していた。そして社会思想史は思想の内容、意味、形態を分析していく方法論を検討する必要に迫られる。私はその問題にはとりわけ関心をもって考察を重ねていった。社会思想史の方法論として有力なものは、マルクス、エンゲルスのイデオロギー論、マックス・ウェーバーの社会層—エートス論、カール・マンハイムの知識社会学、サルトルの実存主義的精神分析、フーコーのエピステーメ論など数多くあるが、私は始めのうちはマルクス主義イデオロギー論とマックス・ウェーバーのエートス論の比較検討に立ち入って考究していた。

マルクス、エンゲルスのイデオロギー論は社会意識、思想、芸術作品を生産者の階級的位置に規定されたイデオロギー形態と見なしてそれらの主要構成因である認知像、心性の様態を究明していく。それはマルクスの『『経済学批判』序言』(1859)に定式化されている。

「生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会意識諸形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである」。このテーゼについて私は次のような見解を持った。1. 生産関係—階級構造内地位が社会意識形態を規定することには高度な妥当性がある。2. だがこのテーゼは意識諸形態と政治的社会的諸制度の対応可変性と個人主体が同時代の意識諸形態の中から一定範囲

内で能動的選択をする可能性を見落している。もっとも、それ以降イデオロギー論はルカーチ、グラムシ、アドルノといった思想家によってより精密に構築されて来ているので、現在一面的に否定評価はできないことを附記しておく。また、イデオロギー論の領域から発展した知識社会学が思想分析方法論の主要な概念素材を提供し続けている点については後述する。

マルクスイデオロギー論に同調できなかった私は、60年代社会科学理論の領域で大きなテーマになっていた「マルクス対ウェーバー、類比と対立」にならってマックス・ウェーバーの思想史方法論を読みこんでみた。ウェーバーは壮大な宗教社会学の中心業績である「世界宗教の経済倫理」の中で「人間の行為を直接に支配しているのは(物質的ならびに概念的な利害であって、理念ではない。それにもかかわらず、『理念』によって作りだされた『世界像』はきわめてひんばんに、転軸手として軌道の方向を決定し、その軌道に沿って利害のダイナミズムが人間の行為をおしすすめてきたのであった。つまり世界像があることによって、ひとはくどこから>そして<何に><救われ>ようと願うのか、そして<ほんとうに>救済されるものなのかどうかという一貫した認識を構築しうるのであった。」と述べている。このテーゼに即して、救済理念はくどこから><何に>救いがなされるのかの<世界像>と<理念>を、ルサンチマンを抱く社会層に提示して、エトス(倫理原則)を伴った信仰を定着させることを論証した。このウェーバーエトス論について私は以下のように解釈した。

宗教理念の民衆的生活規範としてならエトス論は高度な実証的妥当性をもっているが、社会的カテゴリーが細分化し、宗派信仰が多面的に存在する近代後期もしくは現代に時代を設定した場合、この思想分析方法では妥当性が低下せざるをえないのではなからうか。

マックス・ウェーバーに取り組んだ直後、今度は知識社会学をそれぞれに構築した学者たちマックス・シェーラー、カール・マンハイム、ロバート・マートンなどの学説を考察してみた。総じて知識社会学の理論は、多様な徹視的、巨視的諸思想は、いずれも歴史的社會構造=過程を土壌とし